

第二十三號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

文明之母第二十三號目次

本誌は毎月二回三日十八日に發行す

本誌は前金に非されは發送せす

本誌の定價は一册金六錢十二册半年分金六十八錢廿四册一年分金一圓卅錢

全國無遞送料

本誌の廣告料は「五號活字二十三字詰」當り左の如し

	(壹回)	(二回以上)
壹行	金八錢	金七錢
三十行以上	金七錢	金六錢
六十行以上	金六錢	金五錢

本誌の見本は郵券六錢を送らるれは呈す

本誌代金御回送の節は内國通運早遞便又は東京郵便局へ御振込被下度

郵券代用は一割増

本誌の前金將に相切れんとする時は其卷の宿所姓名を朱書して發送すべし

主筆 大矢森之助

發行兼編輯人 中村一 東京深川區諸町十三番

印刷人 小西石造 東京深川區仲町八番地

版權所有

發行所 東京日本橋區大傳馬町二丁目貳拾貳番地 生文社

特別大賣捌

東京本郷區元富士町 盛春堂

仝京橋區弥左衛門町 殿々堂

仝日本橋區小網町四丁目 信文堂

仝 新聞會社

仝京橋區三十間堀一丁目 良明堂出張店

仝神田區佐柄木町 東海堂

仝日本橋本石町四丁目 指金堂

埼玉縣鴻巢町 長島本店

大賣捌

埼玉縣越ヶ谷町 協立舍

仝所澤町 尚文堂

仝浦和町 文華堂

仝熊谷町 近榮堂

仝川越町 水村岩三郎

仙臺國分町 三友社

越中富山 眞田善二郎

秋田 本間金之助

神奈川 吉川伊兵衛

名古屋 永樂屋

大坂 松村九兵衛

仝 前川善兵衛

和歌山 平井文助

出雲松江 盛進堂

熊本 長崎二郎

仝千反畑 文明堂

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

松下禪尼之圖



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

文明之母第二十三號

明治二十三年四月十八日發兌



○看護法に就きて

鬼莽道人

文明之母第二十號に於て我主筆は看病婦論を記述せり。爾後病牀にありて筆を續ぐ能はず。愛讀者は必ず遺憾となされしならむ。偶社友鬼莽君この文を寄せらる。よつて玆に掲載して我が愛らしき姉妹に告ぐといふ

社會に向つて公然取れる女子の職務は、他の婦人が頭髪を結ぶのみに限らざるなり、職工場に從事するに止まらぬなり、其一般の職務外に於て最も緊要なるは是れ看護法の事なるべし。

この看護法に關して始めて學理上に、實際上に、論究し、應用したるは、彼の有名なるミッス、フロレンス、ナイチンゲール Florence Nightingale.

一

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なりしなり。千八百二十三年「フロレンツ」府に生れ、人となり博愛の道に志し、クリメヤの戰に於てスクタリ及バラクラワ病院の看護長となりて、專心看護の事に勞力し、また看護法の順序を立てゝ、看病婦（姉妹）を養成するとに注意し、數多の書を著はせり。（Hints on Hospitals,—Notes on nursing.）實にナイチンゲールは一手弱女なりしにも似ず斯道の爲め戰場に奔走して、負傷者、罹病者を保護して其名聲を轟かせしなり。

之に次てフロレンス、エス、リース Florence S. Lees 夫人あり。「看護婦の手帳」といへる書を著はして、大に看護婦の緊要なると、其職掌の大概とを記述せり。其他斯道に熱心なる婦人は歐土に於て決して稀少ならざるなり。

今や我邦に於ても妃嬪貴女は進むで看護法に從事せらるゝの善業を見るに至れり。（慈惠病院）國家の爲めに賀すべきことならずや。

夫れ婦女子の性質として萬般の美と高尚とに向つては迅速に情慾的に興奮せざるは稀なり。而して交感の性質は實に强盛のものにして、他人の身體上及び精神上の苦痛は自らの苦痛と同じく感じ、或は然らざるも之を同じく想像するは、古今東西みな然らざるはなし」。是れ乃ち一方より視れば婦女子が看護に適する所以にして、亦た隨て弊害の在る所なり。何ぞや。曰く婦女子は交感の性ありて遂に其考慮と業務を誤る多

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

ければなり。

看護法に從事するは非常の仁心なり、博愛心なり、高尚なる業務なり。

然れども世態を通觀すれば、一事一業必ず規律なき能はず。婦女子にこの仁慈なる看護法を業となすを勸告するに當り、苟くも忘却すべからざるは其規律なり、又その資格なり。爰に簡單に之を略叙して、看護法は如何なる者か、看護婦は何如なる資格と規律とに服從せざるべからざるを明らかにせんとす。

第一、看護婦は靜謐閑雅なる性質の者に非れば不可なり。此性質たるや其業を執るに當り尤も須要の者にして、彼の輕諜にして饒舌、彼の粗畧にして僞活達なる者は大不可なり。夫れ病者は非常に感覺の鋭き者にして、其周圍の人に就き、物に就き、一擧一動は盡く病者の注意し來る所となる者なり。是れ感情的の激し易き性の婦女子は縱令ひ自ら之を抑へ制し得らるゝも、之を彼の靜謐閑雅なる性質の婦女子に比すれば、病者の周圍に於て、病者を妨害するを少しとなさず。

第二、看護には特別の才智を要すなり、この仁心ふかき看護法に從事するには自ら好んで之に專心し、其身を殆んど大牢となさゞるべからず、其本心たるや善良にして柔順ならざるべからず、事理に通曉し理會せざるべからず、また温和にして靜淑に沈着な

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

らざるべからざるなり。これ等の性質と兼て要肝なる才智は人體の中外に發表する一事一物の現象を知らず識らず觀察するの念慮なかるべからざると是なり。而して一歩を進めて言へば看護婦は醫師の精神を以て觀察せざるべからず、譬へば患者の容貌急に變すると、其擧動の常ならざると、尿水の濁れる、體温の高まる、睡眠の安からざる、飲食の狀態、言語の何如等は盡く看護婦特別の才智を以て觀察するを要するものなり。知らず識らず之に注意するの精神なかるべからざるなり。

第三、眞誠を愛するの心は樞要なり。譬へば病者の狀態を醫士に報ずるに當り、其自らの過失を隱蔽し、事を僞り報する者なきにしもあらず、此心を欠如しては一に看護の事を託すべからず。

順序を愛するの精神は其急務なり。蓋し放誕は婦女子の性質に非ずと雖も事を理するに當り之を錯雜ならしめて、之を整頓するを解せざる者ありとす。夫れ事を執りて其事秩序なくむば則ち亂るは理の常なり。而して看護の事たる一に秩序を立て、秩序を守るの精神を要するなり、彼の麁にして放誕なるは非なり。

職務上信實忠誠の以て緩せになすべからざるは固とより論を俟たず。其心一に臣僚が君に仕ふると何をか擇べき、夫の自ら執る職務に不忠なるは、自殺すると何ぞ異な

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

らむや。醫士の制定せる者に服膺するは其一大義務なり。之を破る者は夫に貞操ならざると同じきなり。假令一少事なりとも亦た實に艱難にして苦痛なる義務たりとも、一に其制定に從はざるべからず。

第四、看護婦は一般の婦德なかるべからず。非禮に從はず、事變に遇て其職其分と失はず、惠和にして仁慈、廉潔にして清淨なるべし。風儀正しくして、涅せらるゝも必緇せざれ。

第五、看護婦の身體は宜しく健全なるべし。其尩弱にして煩勞に耐へざるは不可なり。故に其年齡は二十歳以上より四十歳以下なるべし、而して平素自ら養ふには保健の食料なるべく、不完全の食品を以て養ふは誤れり、然れとも多食飽飲は執務をして慵からしむれば之を制止するは肝要なり。

第六、看護婦の身体は非常に清潔ならざるべからず。數々沐浴して垢を去り、數々衣を更へて新鮮となし、洗滌し或は之を晒し、彼の汚汗に穢れ、身体の蒸發氣を籠むるは害を自らに受くるのみならず、之を患者に與ふるものなり。爪は甚く短かく剪りて垢を止めず、口內を淸くし齒を磨き、耳をして不潔ならしめず、頭髮も能く理して清潔となす等

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

みな大必要なり。殊に外科上の創傷等に於て、其看護婦の身体一に潔白にして清浄なるを貴ぶなり。

第七、婦女子の手は柔軟にして輕く動き、細事に巧みなる者なり。またその天稟は小心翼々として、勤愼なるものなり此細巧なる手と翼々たる小心は、殊に看護婦に求むる所の者なり。

第八、最後に於て看護婦よ要するの義務は、患者に對するの義務なり。愼默よく口を閉ぢて敢て喋々饒舌をる勿れ。患者の臥床に觸れ、之を突き之に倚るは不可なり。急激に、跫音高く、患者の室に入るも宜しからず。また足を摺りて歩み、聲を微にして私語相話するは患者の煩らふ所なり。激しく戸を閉ぢ、急に物を取る等は禁ずる所なり。其たゞ靜淑にして事に倦まざるの精神を以て勉むるは賞する所なり。

嗚呼、惟ふに看護の職務は難くして容易ならず、之が資格もまたれのづから儼として存するものなり。而れども一方よりすればこれ婦人の身に適當なる天職なり。彼の己れが子女を敎育すると情よりなりとすれば、苦痛に惱める患者を慰むるも亦等しく情なり。敎育、看護其職、其事相似たり。

古人はいはく、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

病の牀に呻吟めきて、此世の望と抛ちたるに、花の唇は無限の情緒を啣みて慰むるなり。ア、悩める心よは實に佛なりけり。危ぶめる魂には命を救へる神なりけり。



○こどものため（承前）

醫學士　近藤常次郎

薬剤に依頼する、とは醫者にさへかゝればよい、醫者の薬さへ服めば治る、と思ふこととなり。俗間でも、一に看病二に薬と云ふ位看病は大切なる物なれども、薬剤に依頼する者は服薬の外は何事にも搆はず。例之ば消化器病にかゝる者あれば、醫者は口養生せよと云ふ、成程と思ひても家に歸れば、とんと忘れるか、又は小兒がねだるからとて、菓子でも何でも與へる、此れで病氣が根から治る道理があるものか。夫れ故に世の父母たる者は、薬剤の大切なるは勿論、其他醫者の云ふとは皆治療の法である、故に其の通り守

七

り、其通り實行せねばならぬ。又素人療治と云ふとあり、あれがよい、此れがよいとて種々勝手な眞似を爲し、或は譯もわからぬ賣藥を無暗にのませる、實に危險な事にて、愈々醫者と悟る時は、最早救ひ難きの場合、どんな名醫でも匙を投げるのみ。

家庭敎育を忽にする者、古來よりの風習で、不都合千万なるは此れなり。前にも述ぶる通り、どんな强壯な小兒でも何時病氣に罹るや譯らず、左れば病氣になりても困らぬ樣小兒を敎育するが大切なり。己に物心つく頃より、醫者よ眤れ親しむ樣敎ゆ可し。今父母の言を假りて其一班を云へば、坊は好い兒である、舌を出してれ醫者樣が來たら又出すのだよ、夫れかられつくをのむのだよ、母ちやんも父ちやんも皆んな飲みまそ、れつくはをいしいの、れ菓子よりれいしいよ、れ醫者樣はいゝれ方だから坊は能く云ふことを聽くのだよ云々。實例を云へば或る家にて、其小兒よ毎朝顏を洗ふ時に、必ず含嗽を敎へて置けり、斯くすれば萬一實扶的里などよ罹りても、治療は大方はかどるものなり。又或る家の小兒は二才頃より獨りで藥を服むことを覺へたり。是れ程大切なる者なるに、世間では往々、醫者と巡査とをきらうを一つにして小兒の泣く時、又は惡戯を爲すときは、何故そうれいたをします、云ふとときゝませんと、お醫者樣に苦いれつくを貰つてのませるから、云々。其他斯くの如くに威しすかす者あり。此等の小兒病氣に罹り

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

しときなどは測らざる難儀を爲す、能く〳〵注意すべきことにこそ。

夫れから、言はで叶はぬ事は醫者に對する觀念なり、此と一々事細に述べんには、夫れこそ大議論なれば、此處ではまづざつと手短かにしておかん。先づ今日の有樣では、病氣だとて依賴さへすれば直ぐ馳付て來て、親切に世話して呉れる者は醫者なり。厭だと斷り云へば左樣ですかと答へて譯なく濟むも醫者なり、左れは醫者は隨分簡便の者である。何にも此れが徹頭徹尾惡いと云ふでは無がが一利一害とて餘りに手輕過ぎて弊害の起る者なり、其不都合を並べ立てれば、此んな輕い病氣だから近處の醫者で澤山だ、と早合點で其醫者の治療を受ける、漸々病氣が惡くなる者とすれば、夫れこそ大變どうもあの醫者は下手だ、いや方角が惡い、彼が上手だ、此れが上手だ、といろ〳〵迷ひ出し、取り換へ引き換へ、醫者を賴む。殊に九死一生となると、病人一人に醫者二十人などゝ云ふ妙な事が出來する。此れで可い者か、惡い者か、誰にても知れ切つた事なるが、此の連中實際甚だ多し。まあ、ざつと考へても素人に病氣の輕い重いが不殘譯らう筈なし、夫れに名も知らぬ近處のお醫者に見て貰うと云ふのは、丸で生命を何とも思はぬ人だと云はれても仕樣が無い。左れは吾兒大事と思はん人々は、始めより自分の信用する醫者を賴み、此醫者ならば吾子の生命を托する事が出來ると思ふ醫者を賴み、其醫者の

九

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

指圖通り、何事も負かず一心不亂に看病すべし。斯くなれば醫者も一生懸命出來る丈けの力を盡し、有らん限り心を勞し醫者と病家と一心合体、神佛ならばいざしらず、人間業では此上療養の法よもあるまじ。

然らば如何なる醫者とそ吾兒の生命を托す丈けの價値があるや、と問はるゝ人あらん、此れは中々六ヶ敷事にて、夫れに生命大切と思はるゝ人々は、已に御承知の事ゆゑ、御返事申す限りに非らず」。然し此れ迄陳べ來りて、肝腎な事柄を殘すも異な物なれば、心附きし事と云はんに、昔より醫者の玄關と云ふ位、醫者は体裁を飾りたがる者、又世間醫者など云ふ惡口もある位、動もすると醫者は病家の機嫌とりたがる者なれども、今日の醫者は決して右樣の者では無い。診察治療上には極めて深切で懇篤なるに引き換へ、若樣の御機嫌をとるとか奥樣のれ氣に入るしうち、などとは思ひも掛けぬ事、そんな事には頓と搆はず、左れば昔の醫者を見た眼で、今の醫者を見、あの醫者は上手だが、何んだか愛想が無い、究屈でならない、と云ふ樣な了簡を起してはならぬ。

夫れから醫者の診察を受けるには、母親が自身で附添ねばならず、何故と云ふに母親ほど小兒に注意する物なし、故に容体もよく譯れば又泣くときも始末よ困らず、万事に掛けて都合よし、若し乳母よて養育した者なれば、乳母が肝腎、何にしろ小兒に尤も親昵

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

たる者が第一なり。

母親の養生が肝要にて、飮食も攝し、衣服も淸潔にし、精神も運動も溫度ぬ樣、益々身体と强壯にする樣注意せねばならぬ。母親が一朝病魔に侵されしなれば、其の苦腦は勿論、頑是なき小兒の食餌を絕ち、他の乳母なり、獸乳なりにて養ねばならず。（經濟上にも已に非常の損を來す）左れば、乳兒ある母親は能く〳〵注意し病氣に罹らぬこそ專一なれ。

以上吾等の述べし所はほんの一汎の事柄にて誰しも知り切つた事どもなり。吾等の言はんと欲するもの中々此にては盡きじ。然かし一時にも爲し難ければ、猶ほ後日を待つて說き及ぶべし。

○育兒衛生法（承前）

醫學士　闘場不二彦述

我が嬰兒が身體は氣候の變化寒暖の模樣により防禦せられねばならず。是に於て衣服の必要を見るなり。

いま我邦の通習を見れば、小兒に着服せしむると五六枚、或は頭を蔽ひ足を裹み、其弊害は少なからざるなり。縱令ひ我邦の衣服調製法は萬般衛生上に適する者たるにも

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

闘せず、その輕くして緊しく嬰兒の身體を制せず、運動を自由ならしめて、羈束せず、また身体の蒸發を誘導して汚穢ならしめざるにも闘せず、何の故に母親は此柔弱軟和なる身體を緊束して苦しめんとするや。左よ數多の規律を書して慈母の心得となさんとす。

一、新生兒の衣服は寒冷を防ぐ爲にありとす。然れども其身體を包裹するに過ぎて之を緊束し、また其運動の自由を妨くべからず。故にその衣服は輕き、和かき、緩き性質を有する者ならざれば不可なり。而して悉く紐を施して以て其体を束ぬべからず。單よ之を上衣にのみ施すにて足れり。

大いなる過は生誕後より直ちに手を合せて胴と共に衣中に包むと是なり。初めより手は袖に通し置くを宜しとす。新生の兒なりとも自由の運動はその快樂なるべきに、無慘にも束縛するは何如ある理由ぞや。七夜前とても七夜後とても、上腕は離さしめて衣を施すべし。

また過れるは五六枚の衣服……狹き衣服よ紐を施すと是なり。小兒の發育は日に時に進み行くものなり。然してまた小兒の胸廓などは猶は軟脆なり。之を堅く胸先によて束り結べば胸廓の骨格はよく發育し得ず。遂に後年に到りても彼のベルツ氏絞

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

溝なる者を存し殘すなり、乃ち胸廓に衣紐の當りしところ、溝を生ぜしなり。これのみならず臍帶を截りし跡に、綿にて之を包み強く腹部を壓するとあり。抑〻小兒は深く強く呼吸を爲すものなれば、腹部を強く締結し、また紐條にて胸廓を束縛するとは、小兒に取りては大いなる不自由にして苦痛なるべし。

衣服となすべき布帛は木綿を以て第一等となし。縮緬、絹はよろしからず。また白木綿を最可なりとするなり。其故は汚穢なり易きを以て數〻之を洗ふの場合となるを以てなり。かの黃色なる繻袢と、花木綿(うす桃色)とは一般の通習なれども、白色の者に若かざるなり。また白色の「フラチル」も宜しとす。

冬は二枚の木綿綿入と二枚の繻袢にて我東京にては足れりとす。筒袖は宜しからず。又夏は腹掛或は腹卷を着せしめて可なりとす。

二、新生兒に頭巾を施すは暖かなる時に於ては要用ならず。冬には眞綿の帽をよろしとす。

三、小兒の衣服は淸潔ならざるべからず。

小兒の衣服は汚れ易し、蓋し小兒は嘔吐すると屢〻にして其口は常に垂涎して頸下は濕ふなり。また襁褓(おしめ)は容易に汚れ、且つ濕ひて、小兒には大不快の感覺を起さし

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

十四

むるなり。故に衣服は屢洗滌し、顎下には涎懸布を施し、襁褓は時々交換すべし。

抑濕へる衣服と襁褓は冷却して小兒は之と感じ忽ち泣き叫なり

新生兒の泣き叫ぶば重もに

濕へて冷やかなる衣服と襁褓の爲め、

飢へて乳を望むとき、

の二原因にあるを多かり。

濕へる衣服の爲めに小兒は「夜啼き」「感冒」等を來すと少なからず而る故に襁褓の如きは屢之を交換し、換ゆるときは之を煖めて換ゆべし。而して一日に少なくも十二枚より廿四五枚の襁褓を要するなれば之が用意もなかるべからず

（以下次號）



○卯月篇

徳大寺實則

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

卯のはなも、ゆきとさくらを、思ひ出て、なつのかきねに、うぐひすのなく。

○夜春雨　　島山健

ひるの間の、かすみやわめと、なりぬらむ、暮れてきこゆる、軒のたまみづ。

○風　　富田愛子

いり日さす、のなかのをかの、ひとつ松、かぜのやどりと、なりにけるかな。

○野遊　　中村慶子

うぐひすの、さへづる野べに、なつさひて、まとゐする日は、樂しかりけり。

○水邊桃　　石渡忍子

ゆくみづも、うすくれなゐに、匂ふかな、いけのみぎはの、もゝさきしより。

○雲雀　　伊藤琴子

のどかなる、野べにさへづる、ひばりかな、すみれの床を、よそになしつゝ。

○詠王昭君長歌幷短歌　　平春海

雪まじり、霰みだれて、よもすがら、北吹風の、あらましき、夜床の上に、つく〴〵と、枕そばたて、來しかたを、おもひいづれば、人の世は、夢なりけりな、眼

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

十六

手巻、いやしき我も、宮媛と、數まへられて、御簾の中に、いつかれし世は、あや錦、袖にかさねて、白玉と、かつらにしつゝ、十寸鏡、みる面影の、かくはしき、花のゑまひを、われながら、我と頼みて、大君の、めぐみの露し、あまねくは、もれしとこそは、おもひつゝ、有けるものを、さかなきや、筆にまかする、うつし繪の、あらぬすさみの、僞りを、正しもあへぬ、うきふしは、せん術をなく、いひしらぬ、國の界に、遥々と、出立道に、おきそはる、袂の露の、消えかへり、引止めたる、駒の上に、しばしかきなす、四の緒の、たえぬ恨を、はるけなん、世こそ知らもね、おしからぬ、命とおもへど、塵の身の、ちりもうせなで、春立てど、花もゑまず、秋來ても、紅葉も見えぬ、あら山の、岩かきこもる、ふせ庵に、われにもあらで、いたづらに、年はかさねつ、おもひきや、こともかよわぬ、國人を、つまと睦びて、たをやめの、まとひもなれぬ、かは衣、袖さしかへて、もろ寢せんとは。

反歌

春の日の光もうとき古塚よ草の緑やいかにのこせる。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

嗚呼、史を讀みて感愴ならしむるものは、靜姫が鶴か岡の祠に和歌を唱へて舞へしと是なり。靜姫が滿胸の涙、何爲れぞ關東の萬歲と頌するに暇まあらむや。

よしの山、峰の白雪、ふみわけて、いりにし人の、あとぞ戀しき。

しづやしづ、賤のれ手卷、くりかへし、昔しを今に、なすよしもがな。

の幽聲は永く蝦夷の空にさまよふなり。天もし情あらば天も亦た悲め、彼の辨內侍が空しく忠臣をして、

とても世に、ながらふべくも、あらぬ身の、假の契を、いかで結ばん。

と唱へしめしを。嗚呼。

○めのとの草紙ぬき穗(一條)

御ものねたみの事、女房の第一の大事にて候。されみ恐ろしくいひ腹立てば家を失なひ身を果す者なり。またさのみ家の內に人ありともされもはれで。侮らるゝも口惜し。光源氏の紫の上に御嫉妬のやさしくみへて候。かの女三の宮のうつろひ玉はんとてさま〲の御調度をも調へられしも、もろ心よ營みて。ある晝つかた、源氏のれはしましたる御手習の御硯の下にれし入られたるを、源氏ひき出してみ玉へば、紫の上御

十七

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

手習に、「身に近く、秋や來ぬらん、水鳥の、青葉の山も、うつろひにけり」。源氏憐と御覽して「水鳥の、青葉は色も、變らぬを、萩の下葉ぞ、けしきとなる」、と書き添へ玉ひて御心ととり玉ひしぞ、げにやさしかりき。この宮わたり玉ひて三日の夜、紫の上ならはぬ御獨寢れ數添ふもさすがに心細く、行末はかくのみこそあらめ、とればしつゞけて、終夜泣き玉へるよ御單衣の袖いたく濡れたるを、源氏曉飯りれはして、御袖をひきやりてそひふし玉へるに、御單衣の袖をひきかへし玉ひしぞ。源氏あかすあはれに、らうたくれぼしめして、御心ざしいとゞまさりぬ。人はかうこそあるべけれ。たゞれそろしくいひはらだつとようなし。

寛文年中に水野信濃守元知、高力左近將監隆の長、奥方妬みに寄りて改易せられ、慶安の始めの年に寺澤兵庫頭忠高相馬家の婿なりしが其の婦人妬み強く、里にゆきて歸らず、忠高この事を苦勞にして、終に自害して家を亡しける。加藤式部少輔明成、京極若狹守忠高、みてく婦人の妬み憚りて實子あれども、披露せずして隱し置きて、其の血脈を絶やす事嘆はしき事なり。福島正則の妻、細川忠興の妻、みな妬婦にて名高し。云々。

(明良洪範抄記)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○問はず語り(二條)　　鈍廼風流士

ともすれば、とはずがたりぞ、せられける、心ひとしき、人しなければ。　琴後の翁

彼の美なる薔薇の花を折らんと欲せば、何爲れぞ其刺をれそれむ。

男子の精神は日光赫く晝の如く、女子の精神は月明らかなる夜の如くなり。晝は星の光を奪ひて、其生業は地上なり。然れども夜は許多の世界と喚び起し、其狀態を天堂となすなり。晝間の事業は活火乾涸、急激をもて滿たさるれど、夜は惠和にして露深く、愛の支配する世なりけり。(ブユル子……有名なる著述家)

今は高傷といへば誰知らぬ者はなし、其年三十九頃の時なりけむ、夏の初の夕暮に、書よむ憩を立出て、さる庭苑に漫然歩きしけるが、蟬の聲は早や收りぬ、綠の木立は滴る許りにて、薔薇の花は今を遲しと咲き匂ひ、四邊はみな詩境なりけり。樹の下蔭を宿とせんとある巨大なる榻子に腰うちかけて、やすらへたるに、一人の婢女と從へたる女ありけり。黃金の髮は紅の頰と映射し、白紵の薄衣は着くるにえ堪ねざる風情なめり。會釋しつゝ高傷が傍へに腰かけて衣上の塵を拂ひなどしける。年の頃は廿歳あまり、誰氏の孃子ならむ。かくの如き人をこの世の友となして樂み送らんはいと甲斐ある

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

とならんとて、語らひ寄り、今は何くれとなくしたしふなりぬ。各々姓氏を告げて別れんとせしに、その女は時の大家ヴルヒュウス氏の妹ならんとは料らざりしに、女も彼は世よ名高き高惕ならんとは夢にさへ思はざりき其驚きは一方ならず遂に夫妻となりて此世の風月を嗜むも無味とはいふべからずとて契りを結びてけり。そのとき高惕に句あり

逍遙蒼林中、精神自悠々、心中無所思、虚冷不欲求。忽見樹蔭蝶魂繁、晩風香飄百花美、嫣然微笑秋波動、遊子情懷不可已。進而欲折之、奈其枯燥隨、併根携歸家敢向閑園栽、花多枝益繁、郁々香益飛。

高惕の婦、名は基德安、容貌は世に稀にして才學兼備はりぬ。(兄維赤は詞賦の大家なり)高惕大に之を愛し、或は其手を執りて腋下に挾み、倶に詩歌を吟誦し、或は抱きながら指尖にてその背に詩句の調子を取り、琴瑟の和諧も啻ならざりけり。基はよく家政を理し、教育にも力を用ゐぬ。高惕が句にいふ、菫菜束來始美觀、宛是我家基德孃と。娶りし後ち二十八年にして婦身沒りぬ。高惕悲哀數月試賦を廢せりといふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY



○打つより撫でよ　　寸草隱士

洛陽浮薄の少年、身に學なく言に文なく、徒らに貴重なる楮君と使用して、古人の糟粕を嘗め鸚鵡を習ひ得て或は一大家と氣取るとは、サテモ激烈殿樣、四相を悟る御方か知らざれど、鳧の脛短かしといへ共、是をつがば憂ひなん、鶴の脛長しといへ共、是をたゝば悲みなん。小說を作る此理よ同じ。世はさま〴〵の人の所爲、巳が思の隨意くよ、寫して見せる筆の文、讀む人の評とり〴〵なるべきに、さるを俳偕師の鬼庶子京鹿子を讀みて思案の外に怒出し、騎虎の勢ひ一轍に誰彼の差別なく十把一束にまとめて、鐵槌もてなぐりつけたる批評を讀みては、他人の事とも思はれず、どうやら隱士も其一人と疵もつ足を退いて、つら〳〵思ひ廻せば是れ皆他人の事にて餘人は兎に角、かく申す隱士は憚りながら大抵の書冊は讀まぬ位で、さりとて小說を書た覺もなく、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たゞぶら〳〵と暮せども、胸のあたりにしめくゝり、あるかなきかの藻塩草、かきあつめたる辛き世の、登りつめたる米價と共に、洛陽の紙價を下落さ、するも、諸人はの寸志、迷惑此上やあると、鬼庵子には極内々にて、初見參の口上かはり、頼れぬさきから書いては見たが、難有きとには下拙くて面白味なし。　夫故強て御讀なされ、惡口いふてくだされ、とは決して申さず、さりとておれ讀みなさるなとは猶更以て……………

足跡しげからねど、さりとて餘り淋しくもなき市街をば、年の頃二十の上を一ッ二ッ御規則通り懸價をすれば十八九とも見申すべき一人の賤女、物思はしげに點頭いて、此方をさしていそ〳〵いく來りけり。　佳配はいまに荒拷のつゞれを身には纏へども磨いて清き雪の肌、降れば悦ぶ煩惱の犬も鼻をばうごめかし、富山の洞へ入にける、里見の息女伏姫に、ましても見ゆる艶麗さ、裸体の美人畫として曲線を拜まば、さぞかしと思ふは必ず美妙の一念凝たる人にて、あながち無理ならぬとやと、其頃人々噂せりとぞ。　左手には鷄卵數十個入れたる手籠を提げ、肩にかゝれる黑髮をば右手にて撥還りながら、思案に余りてや獨卿……米價も日にまして騰貴、親子三人の生計ながら今は粥を啜るばかり。又加之父上の御病氣、母上は看護かたはら他人の洗張、それも此頃の曇がちなる天氣で

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は心のまゝならず、妾は毎日朝早く人より先きに市場に行き、買出しては得意さきを馳廻り僅少ばかりの得所あれども、何事するにも女の手業、されど人間に鬼なき世のたとへ、皇天さまも妾の心を憫きとみそなはしてや、諸人のお慈けにて今日までも細き煙と擧るとは……

夫れに引きかへ噂に聞けば、米の高價は皆進上とか、紳商とか申す御方の所行のよし、人の難儀を外に見て、己が腹肥し、欲に目なき顔面の憎さよ、ソハ兎も角も夜に入れば、母子二人で手内職顔見合しては毎度ながら、お妙和女は不憫、一日も早く聟子を迎り、睦ましき景情を見て安堵したし、初孫の顔も見て死たし、娘盛りは二度となし、身の皮はぎても人なみに、迫ては三度の物だけも腹いッぱいにと思へども、父上の御病氣、稼もならぬそれのみか、母か體も日増に弱くなり、親甲斐もなきこの有樣、必ず恨んてたもるなよ、お妙、和女が不憫ぞとのお仰せ、勿体なきほど難有く、泣きに立ちしはいくそたび親なればこそかくまでに、痴愚此身の行末まて、思ひ給はる慈悲心、猶此上は身を粉骨ても、両親の爲とし思へば、苦中の樂、よしや此身は女なりとも、三度の食をば二度にしてなりとも、手足のつゞく限り働きて、孝行したきときには親がなしとよく人のいふとなるが、妾は親の存生中には是非立派に……立派でなくも、両親の安樂に此世を過すやうに……ト

二十三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

敵も居らぬに武者振ひ、憂ひの顔は膽を潰し、消え失せたあとは村雲を、わけて登りし新月の、眉をば開き、嫣然と、笑ふ姿は美にして、艶ならず、儼として猛からず、かゝる美婦をかく苦しむる貧乏神の心の底は、はかりがたけれど、必ず大社より、免職の沙汰なくてやわるべき。嗚呼妾なから愚痴なりき、往來の人も嘸な傍腹痛く思ひ給ひけめ、幸ひ今日は鷄卵の安物見當りたれば、早く齎ぎて一とも、ふけ、歸るさまは何をがな携へて、父母に喜ぶ御顔拜みたくと、前よりは引るゝ心地後よりは押さるゝ身の素振り、いそ/\と勇んて歩む折しもあれ、學校行きの小兒等なるべし。十二三とも覺しきいだづら顔の二人連れ、筆嚢を肩よりかけ、手にはステッキを振り廻し、何事か囁き、談き來り、れ妙の傍へに寄るよと見しが、何に思ひけん、持たるステッキにて、鷄卵の手籠を發矢と打ち、功顔まも鯨波あけ、笑ひどよめき馳去りけり。打れて何條たまるべき、憂然と音して數多の玉子、微塵となりしぞ無殘なる、餘の事にれ妙は言葉も出ず、唯忙然と佇立たり。此時恰好一人の少年は通りかゝりけるが、彼の小兒等の正なき擧動見るよりも、滿面朱を濺ぎたる憤怒のありさま、鐵拳を振かざし、逃け行く後より飛鳥の如く追ひかけければ、驀の小兒等是を見て大に驚き懼れ、一生懸命兼て修練の競走の足に任かせて走りたれど、追ひかけたる少年の速力や勝りけん、間ちかく迫られ、ゐはや鐵拳彼等の頭上に降りそゝぎ、自業

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

自得といひながら、不慣の者やと見てけるに、何思ひけん立とまり、さきの勇氣に引きかへて力もなげに悄然と、何所へか行きにけり。

○愛國餘譚　ヘルマン及ビドロテア

獨逸　瓦弗殿高傷侯著
鈍陋風流士譯

緒言

斯書はウォルフガンク、フホン、ゲューテーの著にして、獨逸文學史中十八世紀の末に當り、名聲を博せる二大詩史の一なり、一は「シルレル」がワルレンスタイン將軍の戯曲にして、一は斯の書なり。千七百九十五年佛蘭西共和政大に擾れ、黨與相軋轢し、騒亂絶はず、將佐軍兵を率ゐて國境を超え、萊因の江左を侵掠し、將さにチューリンゲン邦に進まんとす。萊因江及麻因江上の諸氏皆な逃れて内地に入る。二年を經てカムボ、フホルミオ府の會議に於て、獨乙共、江左の地を割かる。グューテー大に之を慨き、逃民の辛艱を叙し、材料を舊記に探り、六調二千句の大作を綴り成せり。

斯書一たび世に出つるや、年を經ざるに、佛に、羅丁語に、英に、希臘語に、希伯來に、之を譯するありて、實に其盛を極めたり。今譯者は詩句を譯するの才なく、徒らに無韵にして雅致なく、陳腐にして鄙俗なる散文を以て、天下著名の大作を譯述せり。已に其

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

意を充分に叙する能はざるに、また文字の粗鹵を以てす、是れ譯者の自認して、甘んじてゲユーテーが罪人となる所の者なり。大雅の君子、幸に指摘を惜む勿れ。

譯者識

○第一回

憐見闘山行路難
喜聽義俠仁人辯

金獅舘主人

市場の淋敷して、一人の影だも見えず、市街も殊に靜やかなるは、今日に始めての事なるべしと思ふなり。町々の人々は皆能く寢込しか、或は死に絶たる樣に覺ゆるぞ怪しけれ。家に殘りて留守居せる者は、兎に角に五十人ばかりなるべし。世には物數奇の人の多きものかな、大概見物に赴きたり。されど憐むべきは敵に迫られ、已れの古郷を逐ひ出され、列をなし群をなして、逃げ迷ふ落人ならずや。その通り路なる長堤までは、近からぬも此處より一里の路程はなしと思ふなり。この日中の炎天に砂礫も燬けたる塵埃の中を、太た難儀の事なるべきに、彼の住馴れて朝夕の景色を眺めたる、萊因河向の地を門出して、名殘をしくも擔ひ出せる丈の器具は擔ひつゝ、萊因の谷路を佇り行き、曲に折れて此方へ逃げ來るとは、誠に不憫の沙汰なるを、余は出て見物するといふ氣はなれぬなり。ヲヽ卿は(其婦を斥す)善き事をなせり、古き衣裳幷に米麥飲料等を取出し、希爾滿(其子の名)に託し、不憫な者に施したる由。い

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と殊勝なり、最も施與といふは、素封富有の者の義務なり。然し希爾滿ハ馬を御するに馴れざりければ、今頃ハ如何しつらん、彼の馬車ハ新たに作りたる者にて、四人ハ自由に坐することを得。馬丁の腰臺もあり、別に心配する所もなけれども、只單身にて御する事なれば、曲り角を驅け廻す事などハ、定めて困却することならむ。

と世に名も高くて仁慈の聞えある主人ハ、其家の門下なる倚子に打寄りて、其夫人に物語れば、

夫人　彼の麻布の如きハ少しく惜しからざりしにハあらず、猶ほ役にも立ち、其上需むるときハ、金にても得難き物なりしに、今日は上衣も襯衣も、品の善惡を論せず、皆遣ハしたり、殊に老たるも幼きも、殆んど裸體にて此炎熱に歩行すると聞き、實に憫れに堪へずして、施し遣ハしたりしハ、惡しからざりしならむ。又夫君の戸棚よりも彼の印度模樣の花紋の寢衣を取出して、施せしとも免じ玉ふなるべし。その寢衣ハ已に古びて數年の前に廢棄たれど、緻密なる綿布と、柔かなる毛布より製りし者なりき、別に惜しゝといふにてもあらなくに。

といひも畢らず、主人は微笑して、

まづ惜しかりしといふべし、彼の寢衣は擬べくもあらず、東印度の産にして、今は容易

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に得られず。所し余は最早用ゐざるべし、今の世には「シユルトウ」或は「ペケツレユニツ」との衣服を着て長靴を穿つは、男子の風となり、上靴も毛帽子も共に流行より放逐の有様なり。

夫人　彼を見玉へ、はや落人の群も過ぎ行きしなるべし、見物せし人は戻り歸れり。彼の人の靴は泥に塗れ、彼の人の顔は赤く燒けたる如くなり、誰にても汗拭にて汗を拭はぬ者はなし。　妾には何如にしても、此暑さに彼樣なる不憫の者を見んとて、態々遠方まで行くとは出來ぬなり。　先つ何れにしても談話は充分に聽くなるべし。

主人はその言葉に力を入れて、

此頃の天氣最上の空合のみ打續き、作物はみな善く實のりしなり、芻艸もよく乾きたれば取り集め、また果物も然る可く取り入るべし。　此好天氣一點の雲だにもなく、朝まだきより涼しき風のそよぎ來て、いとも凌ぎよし。　コレにて天氣も定まりしならむ、穀物は熟し過ぎてはよからず、明朝よりして愈々刈り取ることゝなすべし。

と色々の談話も何時しか絶えなんとする時、只た見る男女老若の見物の衆は、漸々對れ市場を超ねて歸り來り、隣家の主翁は、市場の傍よりして、其娘子諸共に「ランダウ」府にて新造せし馬車に打ち乘りて、己か館へ戻り來ぬ。　この主翁といふは市下第一の商估よ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て財産は鉅萬を積み、其家居は前つ日に新たよ築きて、其結搆は世に矜り顏なり。

かくて市中には人々皆な歸り來れり、愈ゝ混雜の樣となり、許多の製作場も一時に共業に取りかゝれり。元來この都會は工業盛ッに、人口も稠密にて、其繁華なるは、他の都府よは讓らぬなり。扨金獅館夫妻は門前を過ぐる見物の人々を見て、種々の取沙汰に餘念なかりけるが、終に夫人はいへらく、

向ふよりして法師は隣家の主人と共に來れり、必ず落人の狀態を見物せしなれば、多少の談話もあるなるべし。

やがて入り來りしは兩人なり。金獅館夫妻よ目禮なし、各ゝ門口よある木造りの椅子に腰うち懸け、靴の上の塵を落し、汗拭にて顏を扇ぎ、相互の挨拶會釋も畢りたれば、玆に藥舖主人ハ呆然たる顏色よて、

誠に人間ハ彼樣なる者なるべきか、誰れも某れも人の難儀を面白がり、かの財産を焚き盡して、天つ大空に漲る烟焰を見ても奔りめぐり、また憐れなる、落人の悲をも屑ともせず驅け廻り、自已等も早晩世の變遷に遭遇て、艱難の目を蒙らざるに非ざるべきに、何如に人間は輕譟なるや。

傍へに在る法師といふは、其齡猶少壯の年なれど、風采は立派よて都會の粧飾ともいふ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

べき品格を備へ、縦令ひこの世を捨てゝ墨染の衣を穿てりとも、世の中の活動よ深く考へつゝ世俗の必要とする事務を辨じ、高き價の聖の道も聖の經も通達して、其奥義の鑰を啓き、時には聖の經は人に運命を與へ、人に思想を假す者よと、愚昧をさとし、其上また分けて浮世の貴き書典をも讀み盡したれば明僧智識と、人に敬はるゝにいたれり、さて。」

法師　天は我儕に害なき欲心を與へられたり、縦令ひ我儕の智慧才識は、如何に充分なるとも、常に事を成し得ぬとあり。然れども我儕の心には、抑へ得ぬ欲心の起りて、終り僥倖にも才識なくて事を成し遂ぐると、少しとせず。彼の物珍しと思はせる心所謂る物數奇の心柄は、人を誘ひ出すに激しき感動を以てし、始めは新しき者を、面白しと思ひて、之を切よ望み、遂に斷えせぬ願望にて、必要の者を玉石混淆の中より探り求め果ては其身を益する善といふ者を、求むに到るなり、嗚呼、浮世の物程、美麗にして人を誘ふはなかりけり。實に少年の愛友は輕諜浮薄と名づくる者にして、輕諜の心により、眼前の危難をも別に意に介せず、痛ましき事柄も、忽ち銷滅する如くよ思ふなり、然れども大人となりては、この輕諜浮薄より着實の分別出て、幸福に於けるも、禍業に於けるも勉勵して以て、之に處理し、善根を生して、惡根を斷ずるなり。

と聽きて夫人は耐へ難く、其終るを待ち詫て、何等の有樣を見物し玉ひしか、聞かまほし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と問へハ、

藥舖主人　今日眼に見し有樣ハ、中々(力を入れて)喜ばしとハ申されず、又多端なる不幸の狀態ハ、何處より物語り始めんや、殆んと之に當惑する程なり。先づ我々未だ野外へ出ぬ內より、杳か向ふに塵烟のたなびきて。前の岡より後の谷いと、引きも斷れず、落人の群の越し行くを見たりしが、やがて横に谷を越へて、往還に出しときハ、馬車行人の雜沓ハいふべくもあらず、目も當てられぬ許にて、一人一人を聞き糺せば、ア丶落ち行くとハ苦しさよと、喚び、或ハ生命を免れて喜ハしと呼び、その樣ハ心々よ千差萬別なり。嘗て家にありしとき、種々の家財を取り並べ、各々勝手都合に整頓し置きて、各々其用をなしたりし器具といふハ、今ハ憐れにも車の上駕籠の中に左排右列に取乱せしまゝ、積み載せて、戶棚の上にハ篩あり、毛氈あり、大盥には臥牀あり、鏡の上には衣帛を打かけて、更に見ばへもあらばこそ。嗚呼我が二十年のその昔、大火の時を想ひ出せは、其折にハ危難といふ者は、盡く人の膽を奪ひ、無用の物品は掴み救はれ、却て貴重の道具なとは忘却せられしなり、是と同樣にて、この落人も誰何を寄邊と定むらん、途方に暮るゝ心より、無益の物品を取り出し、唯に馬牛の背骨を痛むる許にて、古板舊桶を始とし、鶩の小舍鳥籠迄も打ち乘せて、旁腹痛き事共なり。さ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

る上に婦人小兒は綱を以て、之を曳き、自らも無用の器物を入れたる手籠、背負籠にて徒らに苦む許なり。實にや人間は其財産の一より十迄は持ち行くを望むものと、見ゆるぞいたはしき。

かくして落人の行列は、砂塵に塗れて混雜ひと方ならず、一人は弱りし牛と徐かに行かんものをと望めど、一人は歩を濶して急ぐべしと早り、女子子供の泣き叫び、馬牛の嘶き、犬の吼え廻る聲々は、何といわんか、いわんすべもなし。年寄病人は重荷を着けし車の上に打臥すも、左右に搖られて泣き迷ふ有樣は、之をも何よ譬ふぶき」。ろの中に群集に押されて高き足場の往來より、谷澥へ陥いりし小車ありける、無殘よも崩へりて、其中の人は、遠き彼方へ躍付られ、驚ッゝも大音聲にて喚泣たれど、其身に事のなかりしは、不幸中の幸福なりしなり。後より車の函は壞れて、車の傍に落ち、人ハ其下に壓しつぶされて、今ハカゥよと冷々敷も見へたりしかど、誰とても救ふ者ハあく、唯々巳れの道を取り急ぎ、巳れの事をのみ考へて其群に押されく行く許。他人の車の壞れたりとて、車の函なる荷物ハ碎け、あるひハ上よりして人を傷くべきとも、更に顧み搆ふ術もなく、行き過くるぞ無情なる、我々ハ急き其塲に赴き見しに、實に家に在りても其生命ハ危ふしと思ふ、病人年寄ハ、地上よ轉びつゝ、負傷を受け、苦痛に叫びて

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

聲ハ枯れ咽び、大陽の炎熱ハ燬くがごとく、馬の跡の塵埃ハ、其喉を塞ぐ許りなり。
と藥舗主人ハいとも長々しく談話りしが、自ら涙を催うす一場の愁嘆なるべし、主人も
之に感動して、

希爾滿ハ斯の如き人に出逢ひて、之を救ひたらば善からんに、併し出逢たるやも知れず實ハ先刻急ぎて金錢衣服等を、希爾滿に託して送り、一二の人々を救ふべしと命せしなり。然れどもその如き愁嘆の談話ハ再びとせぬ方宜しかるべし、恐懼ハ人の心を深く惱まし、心配ハ却て興味を薄らぐなり、されば、奥の一室の冷しきに、日ハさし込まず、熱き風も來らず、之にて息ひ玉はるべし妻は八十三番（千七百八十三年よ醸造せし物）の酒壜を持ち來り、我々の憂を掃ふなるべし。爰にては蒼蠅の煩はしくて、杯盤に飛び廻れば。

とニ人の客を誘ひ、奥の一室に立ち入りて、涼しき風を喜びつ、再びまとひを談ふ處に、夫人は酒壜杯觴を持ち來り、清き葡萄の緑は羅馬の酒、紅なるは萊因の磐若湯と、それとらぬ色の相映じ、一脚の圓卓子も茶色の光澤を放ちて、是より一小宴の始まるなるべし。玆に主人と法師は各〻盃を觸れ合せ、互に健康を喜び居たりしかど、藥舗主人は其盃を握りしまゝ、唯〻物思はしげに、默念したれば此從の主人は

先づ潔よくナ、飲み乾さるべし、縱令ひ不幸の中にありとも、神明の加護はある者なり、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

人は其身体中にて、尤も其眼を護り愛する如く、神もまた我々を加護し玉ふなり。前年恐ろしき罰ともいふべき大火災の、後も、其一際は不幸なりしかど、續いて神明の加護のあり難や、人々自巳を愛して勵みに勵みたれば、今日の仕合ともなりしなり。苟くも神明の加護し玉ひ、惠愛し玉ふといふとは、總て困難の時に知り得るなり。而してまた各人の勉勵は、かの理高かりし灰燼の中より、此繁榮富有なる都會を新らしく製造せしと思へば、此都會を神明は、今また破壊して、前日百般の勞力を烏有に歸せしめんとはなし玉はじ、

法師　神明の敎を守り、この精神を確と保ちたらんには、平安の時には、心穩かにして、萬の條理明らかならぬはなく、擾乱の時には、此精神は尤も美麗なる慰となり、尤も微妙じき希望となるべし。

言葉柔かにかき口說けば、主人も賢しき思案にて、

余は巳れの事業の爲に、數々萊因の河を打渡り、其雄壯にして蕩々たる勢に驚き、自巳の精神も心力も諸共に、雄壯となる心地するなり。然れども今にして此美しき河岸は佛蘭西人を防ぐ疆壁となり、其河底も萬事を防碍する溝渠となるかを、料り知らざるなり。かく萊因河の天然は邦を護り、勇敢の獨乙人は、國の疆を守り、神明は蒼生の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

民卿を護り玉ふなれば、何とて恐るゝに足るべき。最早敵も其力疲れ何となく、平和を望む樣子なり。是に於て望むらくは祝ひの祭と寺院にて擧行し、非常を戒めし鐘の音も其時は笙笛の調子合となり、喇叭は鳴りて、テーデウム（讃美歌）の節を導き、……余が希爾滿も、此日には新婦を携ひて、法師の前にて神机の傍に、誓への式を行ふべし。以て國々に始まれる泰平の祝祭と同時に、余が家の喜びを擧ぐるならむ。されど彼の少年は常に家事にのみ勉むれど、外交の事はいと慵く思ひ、且つ怯懦に見ゆるなり。人仲間に出つるとは、餘り面白く思はず、其上に世上の少年の、勉めて出てんと望む舞踏會にも、また少女の夜會集合杯にも、希爾滿は避けて出ざるは不審しき事どもなり。」

かく互に談話なし居たりし時に、馬の跡の聲々は遠くより響き渡るかと見えしが、今は其聲の愈々近つきて烈しく家の門口に轢り入れり。



○「むら竹」十三號盲評

大竹忠太郎

此頃の不景氣から、如何に世の中がケチ辛くなつて來たとて、西鶴々々と無暗矢鱈に有難がり。ヤレ八文字屋は乙でゲスの、江嶋屋は澁うガスのと、文壇の保守黨、復古連が騷ぎ立つは、さて〳〵流行は妙なものなり。さて遠からん方々は音よも聞きねかし、近くば寄ッて近眼鏡にも見らきよ。(ホイ失敬)そもこの「むら竹」となん呼べる雜誌は、西鶴黨の親玉、篁村大人の名著にかゝる、短篇小説を蒐集せしものにて、評判盛むにして繪草紙屋の店先さながら憲法發布式の時の如く、群集なすにぞ。小生も是ッ非一冊拜見せむと、近所の繪草紙屋より十三號一部購ひ來り、齋戒沐浴、推戴いて拜見仕り、有難さにおッとばかりよ飛びすさり、隨喜の涙ハラ〳〵〳〵。

まづ表紙は好みの竹籔、仙臺萩の御殿場の如し。しかし白痴(こけ)脅(おど)しの金ヒカものを用いられぬは澁し。其上挿し繪をヌキにせられしは之れも澁し。何しろ一種出色の好雜誌なり、決して有觸れた春の日、秋の夜のれ伽物と同視す可らず。但し同視しても小生は少しも故障御座なくㇱ。…………○以上は只皮想の觀察のみ、いで〳〵これより本文を拜見仕らむ。

(1)煩惱の月

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

煩悩の犬は聞いたことあれど、煩悩の月とは珍らし。之れ篁村の篁村たる所かナ。始終歯の浮くやうな駄洒落と、地口の鉢合せは、てもなく落語家の前座を聞く如くして胸ムカを感ぜり。加ふるに無理な掛語(かけことば)澤山にて甚だ不感心なり。文章はサラ〱として居れど、何處で句が切れるやら一向解らず、さて〱俗物は致し方なきものならずや？　趣向は何にが何にやらトッチンカンにて、小生抔は少しも解らず。まづ十頁松住の談話の條下に「……先容貌は見る通りさ氣質は優しいといふよりは寧ろ涙脆いといふ方適當だろう束髪の沓ギシ〱一寸見ると活潑のやうだが彼(あれ)は勉めて曲げて居るので本質は極氣の弱い情に迫ッては直に命を捨てやうといふ質だけに……」とありて、二十二頁に「……家へ戻り此事を話すとゐ敏は何を思ッたか平生の活潑なるに似ず……」とあるは、敏子は一人まて柔和と、活潑との両性を併有する如く、何むとも合点まいらず。殊に情に迫つては直に命を捨てやうといふ質の敏子が、相愛した川名正躬が、已れを戀ひ慕ひ、病にかゝりしを深切に見舞抔して居ながら、一朝母の勸めに川名の敵の如き、的矢伊三郎と夫婦になるとは、……處女の心情此の如きものにや。！十九頁「……嗚呼近眼ばかり世に殘念なるはなし……」とは同病相憐

三十七

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

む御心中。御推察申す。二十五頁「…………此忘念を打拂はんと机に向ひて書を開けば笑める如き俤の忽ち其處に現はれて文字とは更に讀めぬなり亂るゝ糸のわく方なく書を投ドて立上れば滑らかに淸き聲耳に在りてまたも我名を呼子鳥れぼつかなしや物狂ひと人には見ゐん恥かしさよ…………」の一句は切なる思ひ寫し得て妙なり。コヽ他に類と眞似の出來ない篁村大人專賣の筆鋒で厶（ござ）い。

(2) 腹の子

此篇は僅々四回まて、百花園にでも在りさうな話。圓遊の聲色を聞くと思へば左程腹も立たず。平凡の一德、此所と云ふ瑕瑾なけれど、四十頁に「…………餌の切れた七面鳥の樣にして額からボタ／＼とせつな汗と流すに…………」とあるは、スコ變な文句ならずや、小生は不幸にして、未だ嘗て七面鳥の汗を流したを見たることなし。如何（とひ）なものにやれ閑暇（ひま）の折、御敎示あれ、しちめんてうだなどゝれ得意の洒落は御免。

(3) 大石眞虎の傳

とは寛政の頃より、天保年間に至る迄、有職故實の書よ名高かりし、大石眞虎氏

の實傳を在りのまゝに、大人が輕妙なる筆を以て模寫せられたるものゝ由なればゞ。其行爲に附て非難すべき節々あれど、之れに非難を加ふるを得ず。何むとなれば其事柄事實にして、假作物にあらざればなり。蓋し此編は當編中壓卷の出來ならむ乎。

(4) 當世寫眞鏡

當世寫眞鏡とは大人が小說的の眼鏡にて、當世の人情を描き出されしものにて都合十四枚の端物にて、何れも繪入新聞の雜報にでも在りさうなつまらぬ話。一々批評する價値なけれど、百十八頁に「…………是れ將た如何ともすべからく困却するテ…………」とは無理な掛語、聞きくるし。又百三十九頁に「…………私は字には鳥目だ…………」と在るはもし夜中にて鳥目だといふは面白けれど、「…………去る六日の午後二時頃」とあり、二時頃の鳥目とは變なり。矢張「夜る習つた字だから晝は讀めぬ…………」とでもなされた方、無事ならずや。

さて此外に評する所澤あれど、下手な批評に山鳥の尾のなが〳〵しくしるし、貴重なる紙面を汚すはいと心なき業なれば、此度は之れにて禿筆を洗ひ清め、他日ゆる〳〵細評仕るべし。妄評多罪。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○もめん綿と讀みて漣子に申す

東京　柳月居士

世の人春水の小説を讀むで、淫猥野陋徒らに淫奔の媒たるにすぎずとなしこれを卑む甚し。されども近頃の小説家中ままこれに類するものを公よせられ、美術ヂヤ美術ヂヤ、と却つて得々として慚づる色なきは、まことに嗟嘆のいたりよあらずや。

場所も場所なら、小説も小説、滔々たる天下幾萬の愛讀者を有する文明の母に、顯れたりくあやしげな小説、いかなるはづみか、かく迄に筆を滑らせ、簪が浮雲い、半襟が冷たい、との醜をまねばれし者か。これと見ても明治文壇の梁山伯硯友社中其の人ありと知られた、漣山人はこの頃の時候にてチト……否、山人にてはなかりし、ソレ其のれ筆がダッケ……三年經てば三歳とやら、ボッチャン大分御成人、でも艶ッポサ加減大概になされまし。

また序に(昔し其頑の粲を今様に文字つて)と序に書かれしかど、今一度とくと御勘考あつては何如……これはシタリ‖盲目蛇ものに怖ぢず……叩頭々々。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY



○松下禪尼　讀書庵主人記

松下の禪尼は秋田城之介景盛が娘にて、北條時氏に嫁し、時賴を生む。あるとき禪尼は時賴を招き食を設けんとし、兄なる義景も來りて其用意をぞ助けゝる。時にわかり障子の何處其處となく破れたるを、禪尼手づから紙を裁りて糊よて膳ひけるを、義景の見て、我方にさやうの細工するもの侍り、これに命じて更よ新しく張り直してんなどゝ聞えければ、禪尼のいふ、われ又の日、これを新たにし侍んに、今日は斯の如くして止みなん。凡そ物は小破の時且修理を加へて用ゐたる、よし、若き人に此意を知らさん爲めのみと。時賴の克く勤儉を守り、政理の靜かなりしは、庭の訓の然らしむるならん。（徒然草、東鑑）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

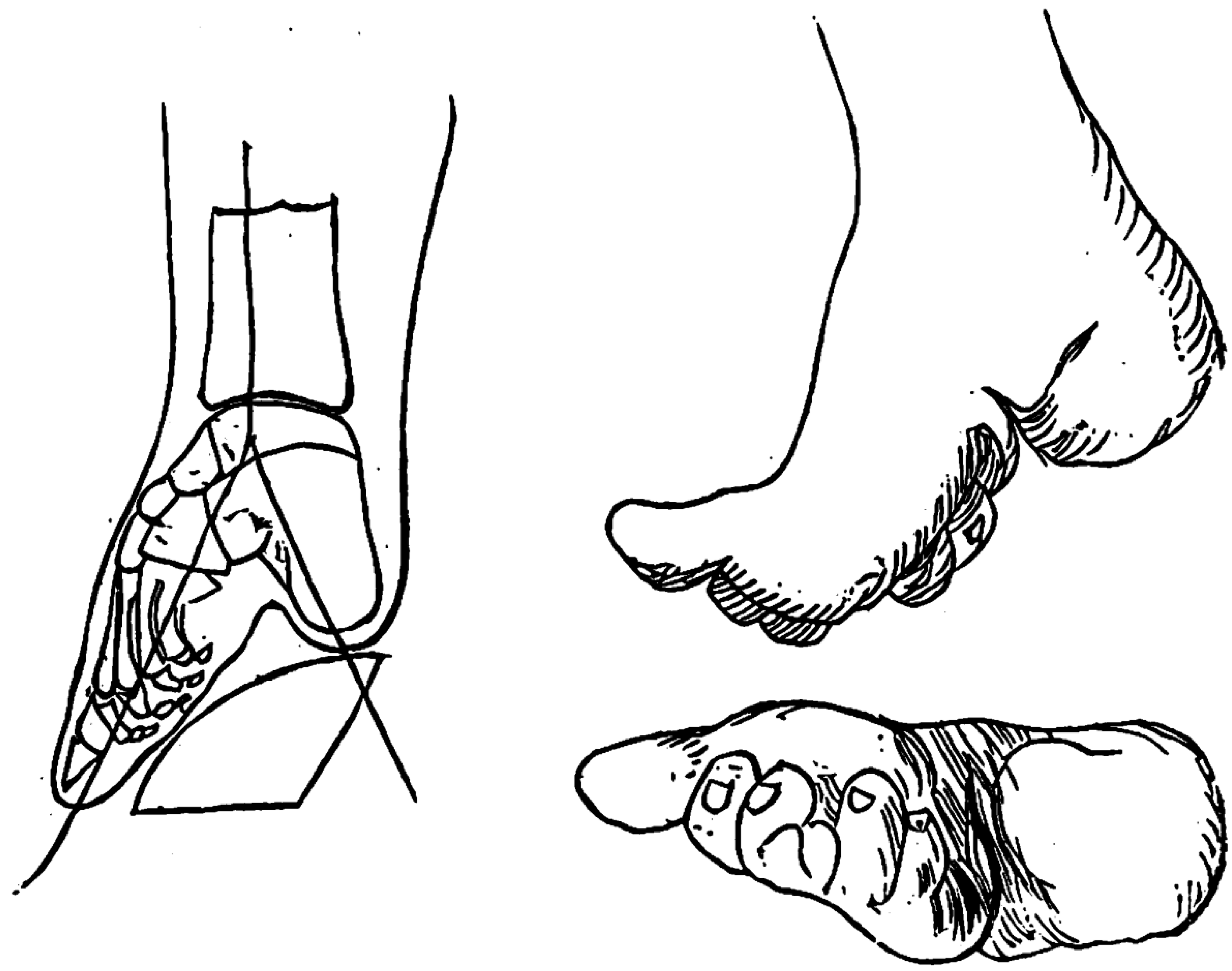
○嵯峨橘皇后

橘皇后と申すは嵯峨天皇の皇后、仁明天皇の御母におはしまし、諱と嘉智子といふ。御心ざま優にやさしく、御顏かたちめでたくうるはしく、黒髮の長く地に垂るゝ許り見事よおはしましけり。しかのみならず、學問の道にさへ御志厚くおはせしかば、橘氏お子弟お爲にとて、弟右大臣氏公と謀り、學館院といふ學舍を建てさせ給ひて、學問を勸め經書を誦習せしめ給ひき、されば時の人お漢土の鄧皇后に比べ稱へてけり。我か國にて女子の學問に志ざせるは、この皇后や始めなりけむ。(文德實錄)

學校といふは、はやう、天智天皇の御時より(西洋紀元一千五百十年代)設けられたりしが、そのかみ女子の學問おいかゞありけむ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

支那婦人ノ足畔形



○カッフェルン人の婚禮

咽烟山人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

てゝにある村に婚儀のある時は全村の人民總出にて、その新夫婦の許に至り、思ひ〳〵の冷評を下す、殊に其の花嫁に向つては、種々勝手氣儘なる評を下すことを得ると云へり。先づ花嫁の朋友誰彼が花嫁を導きて花婿の家に連れ行くなり、此處には花婿の親族一同集り在りて、恥かしがりてはにかめる花嫁を見るより、各々勝手出放題の冷評を爲すを、花嫁は默然として聞き居るなり。例之ば一人が「マー彼の腕を御覽よ、風が吹けば飛んでゆきさうだね、宛然鳥の翼の樣じやないか」とか或は「マーあの腕の太いこと名古屋大根宜敷だね、あのお臀の大きいこと大道臼でもしよつてるのかね」とか、そろ〳〵花嫁の腹をゑぐり始めるなり。斯くてあり合ふ人々は、充分に冷評を下し盡し、最早格別の評を下す者なきに至りて、一同は花嫁を引連れて、其の住家々々を挨拶に廻る。此の時も家毎に大勢の婦人が群を爲し居りて花嫁を苦めるなり。此の時は實に花嫁にとりては比ぶべきものなきつらき目を見るとぞ。如何となれば此處にては戯談のみならず、罵詈し惡口し、嘲弄し盡くさゞることなければなり。一人が肌膚の色が可笑しいと云へば、他の一人は白痴だとか、何だとか、笑ひつ興じつ、叱するが如く罵るが如く、殆んど敵味方と對陣せるが如き觀を爲す。是れ等奇怪なる風習が却てカッフェルの貴女等には好き結果を與ふるものなりとぞ不審議なる風俗なるかな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○最も長き舌を有する者は誰ぞ、而して其の解釋を示せ、　仝

と云へる懸賞問題に應じて續々投稿せしものありしが要するに文物が最長舌の所有者なりとは萬腦一致せるが如し。エンゲルハルト氏曰く遼遠の地に住する人民の發見せらるゝや文物の爲めよ舐り盡くされたり、而して之を能く扶けたる者ハ電話機電信機等なりと。ドクトル、マルックス氏ハ曰く、諸君故詩仙ゲオエーテーをして言はしめよ、彼ハ已に業に之に答へたり、全世界を舐る者は文物なりと。フーゴークラウス氏ハ曰く、最も長き舌を有する者は大陽なり、知らずや大陽は地球より距ること二〇六八二〇〇〇〇哩にして、能く吾人屋上の雪を舐ることをと。ステルニーッエル氏ハ曰く、最長舌を有する者は誰ぞ？奇なる哉此の問、それ問はずして大陽夫人たるや明かなり、仰ぎて天を望ゆば彼れ天に在り、吾人を距ると二〇〇〇〇〇〇〇哩、而して能く屋上の雪を舐ると。或人ハ曰く最長舌を有するものは海なり、如何となれば全世界至る所海水の爲めに浸舐さるればなりと。或人ハ曰く讒誣は一の詭喉を有せり、彼ハ耳語す、然れども其の舌や最も長し、如何となれば彼は何方の果てまでも、其の毒を流せばなりと。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

或人は曰く最長舌を有するものは毒婦なり、如何となれば彼は其の舌頭を以て遠く四方に毒を流せばなりと。或人は曰く、伊太利王こそ、其の國中に最長舌を有するものなれ(其の國勢を云ふ)と。ドクトル、ペー某は曰く、最長舌の所有者を問ふか、余は實に自ら之を有す、余は正直なる廉潔なる獨乙人民として、何處如何なる處までも吾が舌を以て突進すと。讀者よ試に腦漿を絞りて奇警なる解釋を與へたまへ、何となれば余は未だ吾日本人の解釋答案に接せざればなり。

○美麗しき手

西京　栽松道人譯

先生あのお龜さんの手ハ如何してあんなに醜いのでせう。

梅と云へる名におとらぬ花の娘、今學校よりの歸がけ敬師らしき婦人に伴はれ宛も嬉しげに右の言葉。

お梅さんハさう思ひますか、妾はお龜さんの手程美麗しい手ハ學校中にないと思ひますよ。

何故です先生、御覧なさいましな、眞赤になつて丸で松實の樣でハ御座いませんか。私ハあの手で洋琴でも彈いたら、どんなに可笑しい事だらうと思ひますハ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

悪氣はなけれど子供心、流石は教師なり徐ろに梅子の手を取り、

オヽほんに柔い、白い—此手で洋琴—美麗しい事でありませう、だがお母さんの程美麗しくはない樣です、其の譯申しませうか。

ハイどうぞ。

お母さんの手はネ、いつも繁忙しくて、お皿を洗ふたり火をこしらえたり、色々のすゝぎ洗濯から、掃き拭きの掃除から、お裁縫やら、そして貧苦にせまつてつらいめをもこらへて働きなさるお母さんと手助けしたり、お子供たちの衣服やら玩弄物まで修覆たり洗ふたり、それだのにまだ隣の少さい娘が病氣の時などには、親切に介抱してあげなさる。又あの手は何でも生きて居るものには、いつも善い事をしてやりたいと云ふやうよ、前日も市中で疲れた馬や跛の、犬などを撫でゝ慰めて居られた。ほんに助けてほしいと思ふて居るものよは、必ず手を出して助けてやるのだよ。

先生私はモーお母さんの手が醜いとは少しも思ひません。

オヽその言葉を聞くのは嬉しふ御坐います、そしてもう一つ申して置かねばならぬがネ、あの手の美麗しいのは、いつも何事をするにも喜んで、そして嬉しさうに働きなさるからだよ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

アヽ私は、耻うて哀しうなりました。

愛らしき目に玉の涙を浮べながら婦人を見上ぐれば、

可愛らしい御方だチー、どうか其の哀しいと云ふ心で親切な行をして見せて下さいよ、善ばかりはほんに美麗しいものですよ。

The good alone are really beautiful.

○此頃の流行は

黒鼈甲ヱ巻綸したる　金足の簪、陶物の玉に絵を焼き付けたる　中挿の真四角なる、　菅絲の白茶、藤紫、半襟の色のひわ萌黄

羽織の色の銀鼠たる、島田は根上り、　文つまり、前つぼまり。丸髷は鄙か形、下駄の鼻緒のコゲ茶の本天。(小町臺)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY



○高等女學校

女子高等の敎育を授くる高等女學校は、愈〻女子高等師範學校ょ附屬し、其御茶の水なる建物ょて、授業を本月九日より始められたり。

○明治女學校

に於て來學期より多少の改進を施すに付、豫ドめ敎務上の大意を、其機關たる女學雜誌第二百七號は之を公にしたり。其目下の女子敎育法といふ題にて、娓々論述せられたるは敬服といふの外なし。而して女子の敎育とは女子の天性と伸すといふ事なりと言はれたるは我文明の母に於て夙に稱道する所たりしなり。而れとも其論中英文學は大なる文學といはるゝなれど、その大なるとは餘り心醉せしやの疑なきに非ず。思ふに上表の觀察たるに過ぎざらんか、單に英文學を稱揚するとは……其敎科中英學の時間を減少せられたる、好し。また國文の時間を多くせられたるも好し、而れとも師範科を設けられたるは感服せず、餘り多情過ると思ふなり、小學校に女敎員甚だ多からば第二世后代の日本男子をして、すべて女子に對し敬意を懷かしむるに至るや明白なり。米國にて女子が優待せらるゝ元因の一は卽ち是なり云々また米國に心醉するに過たり河東獅子吼を以て善とし、御顚婆を好しとし Degeneration of Civilisation を以て艮となし、此現象を以て男子が女子を敬すと、陰性より考念するとは無理の勃萃論なり。

此頃は隨分淑德閨閤の風と脫却して、彼の機理を貪るに仮々たる處に、薙刀の一科と設け、臆病と柔弱とを遠ざけんとせらるゝや、大いなる迷信ならずや、封建時代の女房はいざしらず、我文明なる此御代に於て野蠻なる今まにょ太平洋群島中に行はるゝ女子の刄物三昧を稽古せしめんとは似合しからぬ事共なり。西洋の体操てそ直に備生上に成り立ちし者なるを。之をも別に稱道せずして、新奇なる者を明治の少女子に好ましめんとするは餘り感服せず、別によき手段のなかるべきか？ 其餘宗敎上の事は措いて論せず。

○米價騰貴

米價ば騰貴して東京府下ょ於ても、淺草區中の甲處、日本橋區中、芝區中の乙處にれ、細民の困難一方ならず、一日一度の粥を啜る位にて、五錢以上の金れ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

貸與へさりしか、今ハ全く貸し切りぬ。　現に餓死せる人さへありしにやに聞く。

明治二十二年度の全國石高ハ五千萬石なりしかど、今年に渉りてハ五百萬石を(洪水、風災にて)減少せしと聞く。　然るに大阪なる猾商ハ自己の利を謀りて容易ならず金融場裡、株式米相場等を紊乱したりしとハ、今ハ隱れなきことゝハなりぬ。　噫此細民を如何せん。

○東洋英和學校の變

同校教師米人ラージ氏ハ本月四日宮下温泉より歸校し、其夜半兇賊の爲に襲れぬ。　夫人スペンサー氏ハ同校長なるが、左額右指を負傷せり。

○禁酒會、東京神田女學校、跡見女學校

アッケルマン孃の盡力ハ東京禁酒會を起さしめたり、角田眞平、禮家小笠原氏等の盡力ハ仲猿樂町に東京神田女學校を起しぬ。

四月八日にハ跡見女學校ハ卒業式を擧げたり。

○成立學舍女子部卒業式

神田區駿河臺なる成立學舍にては、去る一日女子部第二回の卒業證書授與式を、淺草鷗遊館に於いて擧行せられたり。　吾人も招待を受け、其の席末に列したるを以て、聊か茲に其の概況を記するあらんとす。　まづ卒業生徒惣代依田珠子の祝文、英語對話、舍長中原貞七氏の祝辭、生徒惣代關たま子の謝辭等あり。　而して式の前後には、生徒の唱歌および山勢松韻連の箏合奏等あり。　終りに來賓加藤文學博士の演說もありぬ。　畢つて全く散會を告げしは誰彼時にてありき。　偖今回の式に於いて特に吾人の奇に感ぜしは、東髮洋裝の夫人令孃方を多く見ざりしことと是れなり。　以上記し了ッて覺わず獨語しけるは、

吾人の主張する所、追々貫徹せんとするかと。

質疑

○大阪の鶯の舍女史に　鬼卯と申す小說家(戯作者)は遠江の掛川驛の人にして栗枝亭と稱し、烟草を業とせり。　中々奇人にてありし由なり、白河樂翁公通行の時、「世の中の、人と烟草の、よしあしは、烟となりて、後にこそしれ、」といふ歌を鬼卯が店の障子にかき付在りしに、頗る感吟せられたり。

其著には復讐初瀬譚、夕霧書換艸紙等あり。　(鬼卯)

○仙臺しづ子の君　戀川春町は倉橋氏、名は壽平と稱す、駿州小島侯の家臣なり。　小石川春日町に住す故に戀川春町といふ。　畫を鳥山石燕よ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

學び、大に得る所あり、喜多川歌麿の門に入りて、二代目歌麿といひ、風俗書錦繪等に巧みなり。一説にいふ勝川春章に學ぶと。又狂歌を好み、酒の上不埒といふ。又戯作をなし、自畫作れ者多し。金銀先生榮花夢、高慢齋行脚日記、三幅對紫曾我、間違曲輪遊、男女風俗通等の著わり。安永の頃榮へ、寛政元年死す……名高き人であります。（鈍の風）

○女學校日孃　傳芳通朋答ふ。同人は金持にて金銀屯所す是れ鈍なり。此勢にて此頃米價騰貴して庶人の難澁するにも同人れ頓着せず。何邊風が吹くか雲が流るゝかと平氣な顔色、是れ風流士なり。

自ら答ふ。　孃よ孃れ萬葉集を拔き看よ。石川女郎といふ女、大伴の田主といふ男を思ひかけて、となりの貧女のまねして、夜中に火を求にきたりしを、それともしらで、火ばかりやいてかへしければ、よみてつかはしける。

萬葉、たいれをと、我れきけとも、宿かさそ、我をかへせり、をそのたいれを。と古言梯にれ風流士をたいれをと讀まずして、ミヤビチと讀めり。をそを獺として義を假るれ正しからずと解せるなり。故ありて之より取れり。

寄書

○敢テ女學生諸君ニ一言ス

千葉縣　高山浩齋

一陣ノ狂風アリ、飄然トシテ和氣洋々、春風靄々タルノ吾女學生社會ヲ侵襲シ來レリ。狂風トハ何ゾヤ、醜聞是レノミ、其來ルヤ倏然タリ、其去ルヤ忽爾タリ、吾人ハ其何レヨリ來リ、何レニ去リシヤヲ知ラズ。思フニ此醜聞タル、昨年六七月ノ候ニ於テ、殊ニ其旺盛ヲ極メ、其情狀殆ンド一片ノ微火一屋ニ發シ、其火勢炎々トシテ忽チ千市萬街ニ燒及シタルカ如シ。而シテ此火勢ハ一時炎々トシテ、殆ンド抑制スル能ハサリシガ如キノ狀アリシニモ係ラズ、忽然神妙ニモ其焰ハ消ユルカ如クニ滅セリ、吾人ハ當時此醜聞ノ間モナク消失シタルヲ歡喜シタリキ。何ゾ圖ラン、今日又カヽル醜聞ノ再發スルアラントハ、吾人豈ニ悲マサルベケンヤ。嗚呼此醜聞果シテ眞ナル耶、果シテ僞ナル耶、吾人ノ不明善ク之ヲ解スルノ力ナキニ苦ム。

吾人ハ此醜聞ノ今日女學生社界ニ一般ナルヲ認ムル能ハズ、然レ𪜈其或ル一小部分ニ於テカヽル行跡ナキニシモ非リシ事ハ、盖シ不可疑ノ事實ナリト推察セズンハアラズ。乃チ其或ル一部分ニ於テカヽル醜行ノ之レ有リシヿチ疑フモノニ非ス、然レ𪜈之レガ爲メ他ノ清廉潔白ナル淑女チ傷ケ、遂ニ率ヒテ女學生全体チ傷ケントスルニ於テハ、其妄モ亦極レリト言フベシ。夫レ然リ世上具眼ノ士タルモノニ於テハ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

新聞紙上ノ記事假令ヒ如何ニ淫浮卑陋ノ極ニ達スルアルモ、决シテ之レガ為ニ認惑セラレザルベシ。去リ乍ラ其醜聞愈々盛ナリトシ、為ニ新聞紙ノ大材料トナリ、世上ノ士人之ガ為ニ疑惑シ、之レガ為ニ惶懼シ、依テ以テ女學生ノ体面ヲ損傷スルヿ非常ナルニ至テハ、吾人大ニ寒心セザルヲ得ズ。

凡ソ人生ニ於テ其最モ重ンズベキノ一ハ、名譽ナルベシ、苟モ此名譽ニシテ毀損セラレ、埋没セラレタランニハ、人生ノ不面目盖シ亦之ニ超ユルモノナカラン。思フニ女子ノ名譽ハ脆弱ナルモノナリ、微薄ナルモノナリ、唯ダ其レ脆弱微薄ナリ、故ニ壞レ易キモノナリ。然レ𪜈是レ定則ニアラズ、唯漸々社會ノ慣習トナリタルノミ。世ニ不品行ナル男子多シ、不道德ナル男子亦少カラズ、然レ𪜈是等ノ男子悉ク皆、痛ク新聞紙上ニ其醜行ヲ剌撃セラルヽモノニ非ス、是レ或ハ之レ有リ、然レ𪜈之レガ為ニ男子社會ノ全体ヲ剌撃シ、男子社會全体ノ名譽ヲ損傷シタルヿナシ。思フニ女子ニ在テハ然ラズ、無ヲ以テ有トナシ、針小ヲ以テ棒大トナスモノ概子是ナリ。豈ニ一人ノ醜行ハ引ヒテ十人ノ醜聞ヲ生ミ、十人ノ醜聞ハ引ヒテ百人若クハ千人ノ醜行ヲ洩示スルノ弊ナカランヤ。然ラハ則チ少數者ノ汚行醜為ノ、遂ニ他ノ多數者ニ及ビ、潔白無瑕ノ人モ、為ニ其罪科ヲ被ムルノ無情慘恒ナル光景ヲ現出シ來ルハ、盖シ免ル可ラサルノ勢ナラン歟。吾人ハ實ニ其冤ナルヲ憐マズンハアラズ。嗚呼吾人ガ敬スル姉妹諸君、豈ニ苟リニモ不義不德ノ環域ニ沈淪シ了ヽアルモノナランヤ。而シテ此醜評ノ出ツルモノハ何ゾヤ。

吾人ハ思フ、苟モ諸君ニシテ此醜評ノ出ツルヿヲ恐ルヽアラバ、諸君ハ宜ク戒心注志戦々兢々トシテ、其身ヲ省ミ、其行ヲ慎ミ、同輩相警メ

同友相扮メ、以テ此醜聞ヲ未發ニ防ガサルベカラズ。如何ニ世ニ悪德不正ナル記者アルニモセヨ、若シ夫レ諸君ニシテ正理ヲ踏ミ、公道ヲ守リ、過タズ誤ラズ、謹書端潔、毫モ憚ル所ナクンバ、焉ゾ枉ケテ諸君ヲ誣リ、以テ其醜陋汚界ナル文中ニ挿入スルヿヲ得ンヤ、然レ𪜈之ヲ守ルハ殊ニ難シ、之ヲ防クハ殊ニ苦シ、吾人ハ能ク諸君生平ノ情態氣質ヲ知ルモノニ非ス、去リ乍ラ諸君ハ决シテ奢侈ノ風裝ハ帶ビザル乎、諸君ハ决シテ卑俚ノ言行ハ為サヾル乎。思フニ諸君ハ否ト答フル能ハサルベシ、吾人ハ嘗テ知ル、街頭見ル所ノ女學生流テ是レ盛裝美服、其頭ヲ飾リ其顔ヲ飾ラサルハナキモノヽ如ク、其形態ユツ異ナレ、殆ンド一種ノ花柳ノ婦女ニ彷彿タルノ嫌ナキニ非ス、遂ニ吾人ヲシテ一驚ヲ喫セシム。是ヲ男書生ニ比センニハ、其風俗ノ奢否、果シテ如何。去リ乍ラ吾人ハ决シテ諸君ノ徒ニ驕奢侈靡ネ情態ヲ裝ハサルヲ知ル、乃チ其生計ノ程度ニ應シテ、真個ニ適當トセヲルヽモノナラン。左ハアレ諸君ハ儉節ノ美德ナルヲ知ラザル乎、質素ノ良俗ナルヲ知ラサル乎、吾人ハ决シテ諸君ノ驕奢ナルヲ咎ムルモノニ非ス、否諸君ノ能ク其身分ニ應シテ相應ノ服裝ヲナスヲ非難スルモノニハ非サルナリ。殊ニ知ラス驕奢侈靡ノ極、遂ニ或ハ淫浮ノ弊ニ陷ルナキ歟、嗚呼諸君ニシテ斯ノ如クナラバ、如何ゾ此醜評汚聞ヲ刪除スルノ日アランヤ。

然リト雖𪜈是レ一ニ強チ諸君ヲ咎ムベキニ非ス、他ナシ諸君ガ接觸スル四圍ノ境遇ハ遂ニ諸君ヲ驅リテ此奢侈浮華ノ境裡ニ導キタルノミ。吾人ヲ以テ之ヲ見ルニ、東京ホド奢侈ノ處ハアジサルベシ、東京ホド浮華ノ處ハアラサルベシ、隨テ東京ノ空氣ハ腐敗シ居レリ、東京ノ人氣ハ壞亂シ居レリ、如何ナル謹嚴ナル人ニテモ、如何ナル眞率ナル人ニテモ、如何ナル端直ナル人ニテモ、如何ナル貞節ナル人ニテモ、如何

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ナル沈毅ナル人ニテモ、一タビ東京ニ出テ、東京ノ水チ飲ミ、東京ノ風ニ吹カレナバ、多少其驕奢、輕薄、浮華、淫靡ノ風ヲ帶ビサルモノ殆ンド少カルベシ。　是レ實ニ已ムナキノ勢ノミ。　吾人ハ毫モ夫ノ溫順無邪氣ノ少女ガ、忽チニシテ又奢侈、輕薄、浮華、淫靡ノ女子ト變化シ來ルチ怪マサルナリ。　嗚呼八百八街、壯ハ則チ壯ナリ麗ハ則チ麗ナリト雖モ、翻テ其都人ノ心裏チ解剖セバ、唯ダ卑陋、醜穢、淫靡、浮華ノ分子チ以テ充滿スル多キチ見ルノミ。　豈ニ亦悲ムベカラズヤ。　此卑陋醜穢ノ地ニ於テ、此淫靡浮華ノ塲ニ於テ、巍然タル學舍校堂ハ數多建設セラレタリ。　嗚呼吾人ガ愛スル女學生諸君ヨ、諸君ハ此土地チ以テ此塲チ以テ、勉學ノ好地トナスカ、修德ノ良處トナスカ、諸君若シ醜評ノ江湖ニ播揚セザランヿチ欲セバ、何ゾ少ク其操行チ高尚ニシ、其心意チ撿束セザル、然レ𪜈是レ猶無用ナランノミ。　吾人ハ此卑陋浮華ノ都城ニ於テ、幾多ノ女學生ヲ教養スルノ得策ナル所以チ諒解スル能ハサルナリ。嗚呼愛スル姊妹ヨ、諸君ハ如何セントスルカ、吾人モ其宜キノ道チ知ラズ、止ムナクンバ一策アリ。　他ナシ奮然京城ヲ去ルニアリ、此京城ヲ去ッテ故園ニ歸ルニアリ。　故園ノ山秀麗拭フカ如ク、烟霞蒼如タリ、故園ノ水明媚洗フガ如ク、風光藹如タリ、此山ヤ此水ヤ、皆喜ンデ諸君ヲ迎フルナルベシ。　何ゾ況ンヤ諸君ガ愛スベキ慕フベキ慈父母ト愛兄姊トハ、與ニ倶ニ諸君ノ安否ヲ憶ヒ、伸ベテ諸君ノ歸ルヲ待チツヽアルニ於テオヤ、諸君猶歸ルチ欲セザル耶、空ク京城ニ孤客トナリ、罪モ乎キ覺エモナキ醜評ヲ傳播セラレ、以テ其名譽チ損シ、腐敗セル京城ノ人氣チ呼吸シ、混濁セル京城ノ人氣ノ中ニ投シ、以テ心ニ滿足トナス。ナ　諸君焉ゾ歸ラザル、故園ノ風光秀麗ニシテ、其空氣ヤ澄淸ナリ、其空氣ヤ溫厚ナリ亦何ノ足ラサル所カアラン、況ンヤ諸君ガ愛スル慈母ノ膝下ニ於テ、愛姊ノ坐側ニ於テ、文筆ノ事ニ從ヒ、鉛槧ノ業ヲ勉メバ、其愉快淸適、豈ニ吾人ノ饒舌ヲ待タンヤ。　今ヤ文化日進、至運都鄙ニ普キノ時ニ方リ、通信講學ノ便亦大ニ開ケタリ、郵筒ノ便日々欠クルヿナシ、豈ニ昔日ノ比ナランヤ。　勉强セヨ、勉强セヨ、田舍ニ於テ勉强セヨ、苟モ苦心熱慮、以テ其學ニ從事セバ、其進步、其結果豈ニ必スシモ京城游學ノ時ニ譲ランヤ。　吾人ハ紅塵万丈、熱鬧極リナキノ街衢ヲ出テヽ、寧ロ風流瀟洒、閑雅幽靜ナルノ地方ニ入リ、其風淸ク烟淡ナルノ境ニ於テ、其靑草萋々、翠樹蒼々タルノ地ニ於テ、朝ニ學ビ夕ニ誦シ、以テ其精神チ養ヒ、其心思ヲ樂マシムルノ衞生、經濟ノ原則ニ適フモノナルチ信シテ疑ハザルナリ。　嗚呼敬スル姊妹ヨ、吾人ガ諸君ニ望ム所實ニ此ノ如シ、知ラズ諸君ハ以テ如何トナスカ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

投書規則

本社に於ては今般投書規則なるものを設け汎く投書を望む左の條々御一覧の上筆硯に從事せらるゝ諸子は御投書あれ

一必ず學術の範圍を超ゆべからず政事に亘るものは止むを得ず沒書とす文藝雜錄批評など最もよろし

一必ず亂書すべからず如何に面白き者にても亂書讀みがたきものは沒書とす（半紙ならば一枚十行美濃紙ならば十三行位に認むべし）

一是迄往々寄送し來れるものにして郵便先拂若しくは不足等あり爾後斯くの如きは返戻すべし

一雜誌に掲載したるものには其價値に循ひ相當の報酬をなすべし

一單に原稿のみを寄送せらるゝものは郵筒に「生文社編輯係御中」と認むべし

一原稿取捨は編輯係に一任すべし決して其返戻を申込むべからず

一掲載の遲速も編輯の都合に依れば決して催促すべからず

明治二十三年四月

東京日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地

生文社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小生儀疾くに肺病に罹り居り候處此の頃病勢大ょ猖獗を極め候より帝國大學醫科大學第一醫院へ入院致候此段辱知諸君及讀者諸子に謹告仕候

東京本郷醫科大學第一院內科四號

大矢森之助

附言 一新機軸を出だせる病氣見舞狀御送附下され度讀者諸君に切望つかまつり候なり

是れまで文明之母の爲に原稿を寄送せらるゝ諸君中往々半紙一頁ょ十三四行廿七八字位も書き込み送らるゝものあり斯の如きは刪削せんとする所あるも爲し得ず句讀せんとするも施し得ず其他不都合尠なからざるを以て投書規則にもある如く爾後必ず左の定規に據られんことを望む

美濃紙一頁　十三行二十七八字位

半　紙一頁　十行二十三四字位

然かせざるものは止むを得ず沒書とすべし

生文社編輯部

傳道會雜誌第貳拾貳號

目錄

發行所　京都市東中筋花屋町下ル第十九番戶　眞宗青年傳道會

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

東洋學會設立ノ生旨

維新以來奎運隆興學術革新專ラ西洋ノ所長ヲ資リテ以テ吾進修ヲ圖ルモノ駸々乎トシテ止ムヘカラザル勢アリ是ニ於テ乎一時風尙ノ向フ所彼ヲ尊ヒ己ヲ卑ミ東洋固有ノ學術ニ至リテハ概シテ迂濶トナシ捐テヽ顧ミザルニ至ル抑々東洋ノ學術ハ其由來スル所最久シクニ之ヲ西洋ニ比較シテ互ニ美惡長短ノ差ナキニ非スト雖若シヨク其會通ヲ觀テ取捨ノ宜シキヲ得バ豈開物成務ノ大業ヲナサヾランヤ願フニ今日之ヲ講討研尋シテ以テ互濟ノ美ヲ致スモノ抑亦東洋學者ノ任ニ非ズシテ何ゾヤ故ニ我輩相謀リ東洋學會ヲ設立シ專ラ本邦及ヒ支那及ヒ印度等ノ學術ヲ研究シ之ヲ西洋諸邦ニ參シ其美惡長短ヲ講明シ長ヲ取リ短ヲ捨テ美ニ就キ惡ヲ去リ固陋ノ僻習ヲ除キ開明ノ隆域ニ達セント欲ス冀クハ大方ノ君子共ニ此擧ヲ贊助シ陸續加盟竟ニ本會ノ主旨ヲ貫徹シテ以テ國家ノ奎運ヲ裨補センヿヲ

規則要略

第一　本會ノ目的ハ本邦支那及ヒ印度等ノ事物ヲ尋繹シ博ク學理ヲ研究スルニアリ

第二　本會ノ事務所ヲ東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地ニ設ク

第三　會員タラント欲スルモノハ其族籍姓名住所ヲ詳記シ本會事務所ニ報知アルヘシ

第四　會員ハ會費トシテ毎月金十錢ヲ前納スヘシ但數月分取纏メ郵便小爲換或ハ郵券ヲ以テ送付アルモ妨ナシ

第五　會員ニハ毎月發行スル雜誌ヲ無代價ニテ配付ス但二部以上ノ配付ヲ要求スル時ハ一冊ニ付金五錢ヲ納ムヘシ

第六　本會ハ臨時ニ演說會ヲ開クモノトス但會場ハ其都度幹事ヨリ報告スヘシ

第七　會員ニシテ論說考證等ヲ寄送スルトキハ編輯掛ニ於テ之ヲ採擇シ本會雜誌ニ登錄スベシ

第四編第三號目次左ノ如シ三月卅一日發行

會告

本誌見本御入用アラハ一冊郵券九錢ニテ呈スヘシ

東京々橋區南傳馬町一丁目十二番地
發行所　東洋學會事務所

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●●●●●●●●商業雜誌●●●●●●●●

毎月十五日卅日二回發刊
本誌定價一冊金八錢（全國無遞送料）
贊成員へハ七錢ノ割

本誌ノ目的ハ實業ヲ振起シ少壯ヲ提醒スルニ在リ○記事ハ社説實業問答商業英語解輸出入物貨統計內外雜報農工商業小説○雜報ハ各物貨ニ據テ部ヲ分チ尙ホ起業新發明農工等ノ部ヲ設ク○雜報內本誌ノ得意トスル所ハ決シテ他ノ新聞雜誌等ニテ見ルヲ得ザル歐米各國ノ緊要ナル新説奇話ヲ記載スルニ在リ○新發明機械器具ハ圖畫ヲ挿入シテ之ヲ説明シ歐米各國

實業上ノ新思想ヲ輸入シ世界萬國ノ商情ヲ詳細ニ報スル我國實業雜誌ノ巨擘タリ

橫濱市羽衣町一丁目十九番地

橫濱商業雜誌社

小學生徒之友

●見本進呈（小學校へ）
●一冊代價三錢（郵稅共）
●毎月五日廿日二回發行
●見本進呈（小學校ヘハ）

橫濱市羽衣町　橫濱文社

樂器着荷廣告

弊店儀兼て歐米へ注文致置候

ピアノ　オルガン
ヴワイオリン　笛、紙腔琴
音樂書籍等

着荷致し候よ付定價を改正し就中オルガン。ヴァイオリン。等は從來の**二分の一**に販賣可致候間御一覧の上御購求下され度伏て是祈る

靜岡縣濱松
樂音舍製
風琴

右は近頃諸器械を設置し凡て歐米と異なるなき品を製するに至れり附伸今回內國勸業博覧會へも出品致し候間品質如何は同會にて御覧下され度候

金十八圓より金百二十圓迄

各種

和製ヴァイオリン

金四圓より金八圓まで

各種

諸樂器深切に御直し可致候



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

松本民治先生著書

小學尋常科習書帖　全八冊

一 尋常科	一年生用	前後二冊	實價金八錢	（壹冊廿壹枚實價四錢）
一 仝	二年生用	仝	實價金八錢	（壹冊廿壹枚實價四錢）
一 仝	三年生用	仝	實價金八錢	（壹冊廿壹枚實價四錢）
一 仝	四年生用	仝	實價金八錢	（壹冊廿壹枚實價四錢）

小學生徒に課するの目的を以て纂集したる書學の臨本は世間其幾何なるを知るべからず隨て出れば隨て用ゐられ充棟汗牛もたゞならぬ有樣なり然れとも兒童實際の實力を斟酌し尋常科生の爲に最も興味ありて最も摸倣し易からしめたる習書帖にして然も實際是等の兒童を教育する人士の考按に出てたるものまて教授上に最も適當なる必須の習書帖と名くへきものに至りては世間未た其種れ多からさるを知る是れ弊舗の此書と刊行し尋常科用の習書帖となし以て教育に從事せらるゝ君子の勞を助け然して彼の愛すべき兒童の心力と手腕の運用とを暢發せしめんと欲する所以なり之を約言すれば書學用紙を購求するに及ばず價格も非常に廉なると編纂の新案なるとにより發賣以來十數日の今日にして已に數千冊を賣出し日每に多數の注文あるは弊舗れ深く謝する所なり

謹て江湖の小學に從事せらるゝ諸君子に稟す幸に本書を教授上に採用せられ其適否を試み賜らんことを希望す依て見本御入用なれば郵券二錢相添御申越有之候れゝ一冊進呈す

出版人　埼玉縣北足立郡鴻巢町百十四番地　長島爲一郎

發兌人　文明の母發行所　東京日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地　長島恭三郎

（遞信省認可）

明治二十三年四月十八日印刷出版

（東京神田區柳原河岸銘茬堂印刷）

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY